

## きつかけはカニから

**司会** 生きものが好きになられたきつかけは、何だったんでしょう。

**養老** そもそもはカニです。穴を掘って、小さいきれいな砂玉を作るコマツキガニで、鎌倉海岸でのごとです。幼稚園へ入る頃まで、ずっと見ていました。こちらが近づくと、ずっと穴へ消える。じっとしているとまた出てくる。そして、次々と玉を作って並べるんです。

**川那部** なるほど。京都生まれ京都育ちの私の場合、砂浜のカニを見たのは、大学三年のときですが、魅了されました。ゆっくり観察できるし、砂玉作りはなかなか楽しいですね。ときどき鉗はさみを挙げて反りくりかえって、「あくび」もするし…。

**養老** 毎日ずっと見ていた。それに、家の前などにしゃがみ込んで、じつとものを見ている機会も多かったのです。おふくろが出がけに「何をしているの」と聞くから、「イヌの糞糞」と答えました。用を済ませて帰ってきてみたら、まだそのままの恰好で、ずっと見ている（笑）。実は、糞糞にきている虫を見ていたのですが、詳しく言つのは面倒だったのです。だから親戚のものに、「あの子は絶対知恵遅れだ。三〇分もイヌの糞糞を見ていた」などと言って、心配したんです。

いちばん好きだったのは、じ

つは魚捕りだったのですが…。釣りは、魚があまり見えないので、それほど面白くはなかったのです。

**川那部** 昆虫少年は私の周りにもたくさんいたけど、たいていの人は採集だけに興味があるのでしょうか？ 養老さんは子どものときから、観察と採集の両刀遣うごいだったわけですね。

**養老** 僕は少なくとも、虫の好きな奴のなかでは、見るのが好きだと言われています。標本を見に行っても動かなくなり、時間がなくなってしまうものから、しかたなく切り上げるんです。

最近も、イギリスのロンドンの自然史博物館で、虫を見ていたんですけれど、十日ほどのあいだ朝から夕方まで見ていたのです。そういうときがいちばん幸せです。

## 子どものうちは

### 感覚の世界を

**養老** 人間の意識には、感覚の世界と概念の世界との二つがあるって、それらが互いに重なっています。例えば、大きさの違うリンゴとナシがそれぞれ一つずつ、合計四つあったとします。リンゴとナシの二つにまとめるのがふつうでしょうし、さらに果物として一つにまとめることもできる。階層で一つにまとめるというのは、概念の世界です。だけど、子どもがどれかを選ぶと言うときには、大きさの違いは

特に重要ですよ（笑）。感覚の世界はふつう、すべてのものは違つとしてとらえますが、虫を採つたり見たりするときは、色や形の違いがすべて気になる。つまり、感覚の世界で考えることになるわけですね。

**川那部** 養老さんは、虫という存在、つまり「もの」について話をなさつたけれど、そのことは働き、つまり「こと」につい

これこそがという正解はない。これ以外の何ものもないという正解はありえないですね。

琵琶湖博物館館長  
川那部 浩哉



もしるいのでしょうか。

ても同じですね。「食う 食われるの関係」なんて言うけれど、ほんとうのところは、つまり現実に起こっているのは、「ある個体がある個体を食う」と言うことからです。

**養老** ええ。感覚の世界ではすべてが違うという現実を知り、それをどういうふうの一つの言葉、概念にしていくのが、人間が生きていくうえで、このトレーニングがたいへん大事だと思つたのです。だから、少なくとも子どものうちは、体を動かして虫などに肌で触れ、「すべてが違う」という感覚を磨くことが必要です。僕が、虫の世界みたいなものを勧める理由は、ここにあります。

何がわかるのかわからないから、だからこそそれは面白い

**司会** 養老さんは、ヒゲボソウムシを熱心に調べられています。この昆虫はどういう点でとくに

川那部 そう。答えがわかっていくようなことしか、やらない。問いかけようとはしない。いっそや「答えの世界には自由がない。問いの世界には自由がある」という標語を見たことがあって、たいへん嬉しかったのですが、今は、問いそのものにも自由がなくなつてきている。

## 館長対談

# 虫を通して世界を見る

2005年9月3日(土) 講演終了後、琵琶湖博物館館長室にて  
司会進行 / 八尋克郎

**養老** 日本の学問の、とくに悪いところですね。「禁欲的」とも言いますか…。それに、科学的結論はそのまま正しいと思っっている人がいる。科学の結論は、つねに事実と、いや前提や方法とも対になっているものです。「こういう根拠からすると、こう考えるのが正しいのだ」と言うだけのことで、だから、それをまた考えたり調べたりしてみようと言う、イメージーションが刺激されるわけです。

### 不思議には正解がない

**養老** 『世界ふしぎ発見』という番組がありますでしょう。決して悪い番組ではないんですが、最後に必ず正解を言う。「正解があるような不思議とは、いったい何なんだ!」と、いつも怒っているんです。

**川那部** ははは。私は、宿泊先ぐらいいしテレビを見ないので、その番組は知らないんですが、ありそうなことですね。科学なんて、どんなに発達しても、ごく一部しかわからないのですから…。いや、そもそも解があるとは限らないのですし…。

でも、何かを問われたとき、「あでもない、こうでもない」というと、だいたい嫌な顔をされますね。琵琶湖博物館には質問席と言うのがあって、私も含めて学芸員などが交代で座っているんですが、大人も子どもも、「早く正解を教えてください」と言い

たげな人が多いですね。

**養老** 入試なんかすこいじゃないですか。正解のない問題なんか出したら、袋だたきにあります。「正解のないのは不祥事だ」みたいに新聞に出ます。人生なんて正解のない問題の連続じゃないかと、文句を言っています。

**川那部** xを付けるだけのものとはもかく、文章で答案を書くものでは、以前は大学学部の入試でも正解のないのを出していましたが、この頃はたいへんかもしれませぬね。大学院の入試には、少なくとも私の在籍中はずっと、正解のない問題ばかり出していましたが…。

**養老** 下手をしたら、最近はず「くび」になりますよ。

**川那部** 意識的に、わざと出したらいいんです。

**養老** それでも怒るでしょう。それで採点すると、主観的だと言っ。

**川那部** 絶対的な客観性というようなものは、ないんですけどね。事実を踏まえたいろんな人の主観の総体が、いわば客観だし…。それにこれこそ、多数決の問題では全くない。

少なくとも、生きものの暮らししかたには、判然とした正解などはないということぐらいは、どうしてもはつきりしておかなければいけませんね。

### 虫を見てロマンを語ろう

**養老** 僕はなぜこれを強調する



かということ、最近の男の子は元気がないということが、ずっと気になっているからなんです。大学生について言えば、絶対そうなのは、女の子ばかり…。男の子は、ほとんど入口のドアの近くにおいて、すぎがあれば逃げようとしている(笑)。実際、世の中でも、男は元気がない。元気のいいのはおばさんだけで、じいさんのほうは、ほとんどが機嫌が悪い。

**川那部** ははは。私のことですか、養老さんですか。

**養老** それで、たぶんこうじゃないかと思っっていることの一つは、

ロマンがないことなんです。男はロマンチズムがないと死んでしまっ。わけのわからないことをやるとか、役に立たないことをやるとか、そういうことが一種のロマンです。頭の中では何かを、いつしようけんめい考えている。「こうだと良いな」とか、「このようにしてみよう」とか…。

それを、いまの社会は殺してしまっている、余裕とか夢とか…。既成のことばではちよつと言いくいんですけれど…。やっぱりロマン主義というしかないですね。これは、すべてがきちんと計算されているかのように、間違っと思っっている考え方の対極にある、今の世の中にいちばん不足しているのは、それです。

だから、虫…。

**川那部** 生きものというのは、少なくともどちらの思ったようには、動きませんものね。もつとも以前に、ミミズだったか何だったか、そのかたちが解剖の「教科書」にあるのと少し異なっていたことがあって、「このミミズは、間違っっている」と叫んだ学生がいましたか…。

**養老** 解剖の実習でも、「先生、この死体、間違っっています」という学生がいましたよ。最初に言った、実体と概念との関係も、わからないのです。

それに、自然の作っただけのもの、やはり何よりも美しいですからね。

解剖学者  
養老 孟司氏

1937年神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学医学部卒業後、解剖学研究室に入る。1995年東京大学医学部を退官し、現在北里大学大学院教授、東京大学名誉教授。『ヒトの見方』(筑摩書房)『バカの壁』(新潮社)など著書多数。

人生なんて正解のない  
問題の連続じゃないかと  
よく文句を言っっています。

